生涯学習課 NEWSLETTER

福島県文化スポーツ局　生涯学習課
℡ 024－521－7404　　fax 024－521－5677
E-mail shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp
No.12　R4.2.21

ニューズレターの概要

このニューズレターは、平成２７年度に開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の後継事業として、震災からの復旧・復興や地域課題に取り組んでいる県内の関係者等の情報を共有し「学びをひろげ、つなげる、いかす」ため、年に２回発行しています。

皆様方からも、多種多様な情報をぜひ当課までお寄せください。日常的な取り組みや様々な企画のもと実施されたイベント等、生涯学習に関する情報ならどんなものでも結構です。

今後も、互いに情報を共有し合い、継続的な取り組みが推進されるよう積極的につながっていきましょう。

地域活性化のために「NPO法人福島就労支援センター」

ＮＰＯ法人福島就労支援センターは２０１５年12月に福島市で設立された。同センターは、パソコン教室等を行う「就労支援事業」と学習教室や交流会の開催等を行う「地域活動事業」の２つの学びの活動を行っている。今回は、同センター事業統括の原浩平氏に、地域活動事業の１つである「避難者と地域・若者の学び合い交流事業」を中心に設立の経緯や活動の様子について話を伺った。

人と人のふれあいの広場

同センターでは、避難者・地域住民と大学生の多世代交流など、「地域交流イベント」を開催してきた。これまで参加した避難者からは、若者と交流し震災から今までの経験を若い世代に伝えることで自己を振り返ることができ、前向きに生きることができるようになったという声が聞かれたそうだ。今回はイベントの１つである双葉郡からの避難者と地域住民の交流を目的とした農業交流会にお邪魔した。

野菜を作って、食べて　笑って、元気いっぱい

同センターでは、３年前から福島市北沢又地区の畑で、復興住宅「北沢又団地」に暮らす浪江町等の住民と北沢又の住民が一緒に野菜を栽培する活動を行ってきた。県営北沢又団地自治会長の熊田伸一氏は「毎日、畑に通っている方もおり、野菜を育てることが生きがいになっている。コロナ禍で家に引きこもってしまうこともあるので、少しでも外に出られるようになるのは、とてもうれしい」と話す。避難生活の中、個人で野菜を栽培することは難しいが、場所と機会を提供していただけたことで、生活にも楽しみが出てきたと話す参加者もいる。もともと農業を営んでいた方や初めて農作業をする方など様々だが、自然と交流が生まれ野菜栽培の工夫などについて語り合っていた。

共用の畑で協力して苗を植える様子

野菜の栽培を通しての交流

交流会は、毎月定期的に開催するようにしている。開催の間隔があいてしまうと、参加者が参加しにくくなってしまうため、参加しやすいように工夫しているそうだ。また、畑は個人のスペースと共用のスペースに分けてあり、自分の好きな野菜を育てることができるようになっている。農作業は黙々と一人で作業に集中してしまうため、共用のスペースを設けることで、みんなで作業する場を設定したり、収穫した野菜を使った料理教室を開催したりして交流を深めることができるような工夫もしている。今年は、震災10年目の節目として、米の栽培に挑戦した。ふるさと浪江町とのつながりを維持しようと、浪江町の農家から譲り受けた苗を植え収穫の喜びを分かち合った。来年は、畑の面積を増やし、果物の栽培を通して更に交流の輪を広げ深めていきたいと原氏は語った。

お米の収穫を喜ぶ参加者たち

農業地域交流のお知らせ

短歌は心のふるさと
「須賀川短歌会」

須賀川短歌会は、須賀川市内や近隣の短歌愛好者で構成しており、現在は会員数14名で活動している。

今回、須賀川短歌会の会長小野口進氏に、須賀川短歌会設立の経緯や活動の様子、今後の展望などについて話を伺った。

こういうときこそ「心のふるさと」である短歌を詠むことで気持ちを前に！

昭和45年まで須賀川市中央公民館の短歌講座で学んだ人達の間に「これからも歌を学びたい」という気運が高まり、昭和46年4月に「須賀川短歌会」が発足した。発足と同時に、毎月歌会を開催するほか勉強会を開き、互いの作歌力向上に努めてきた。それから50年にわたり活動は引き継がれ現在に至っている。

毎月15日に須賀川市本町の「風流のはじめ館」で月例歌会を開催している。例会では、会員らが詠んだ短歌を批評し、作者が解説を行う。初めに、作者が分からないようにして1人2首ずつの短歌を1枚に編集した中から、1人3首を選び批評を考える。歌会の参加者は、黙々と短歌を詠み、情景や思いを想像しながら批評を考えていた。また、辞書やスマートフォンで意味を調べる姿も見られ、その姿は真剣そのものである。

全員が批評を考え終わったところで、1首ずつ、会員から批評をしていく。その際、聞く人は決して言葉を挟まず、否定せずに最後まで聞くことが徹底されていた。そのため、話す人は、どんなことでも自分の考えや思ったことを言葉にして表現し、安心して自由に話すことができ、とても穏やかで和やかな雰囲気の中で会が進められていた。

風流のはじめ館で行われている
「須賀川短歌会」月例歌会の様子

最後に、短歌の作者が発表され、本人から短歌を詠んだ思いや情景の話を聞くことで、批評の中で気になったことや疑問に思ったことになるほどと納得することができ、31音の世界が更に深まるのだそうだ。

歌誌「峠」の誕生！

昭和53年4月、会員が待ち望んでいた歌誌「峠」が発行された。誌名は、初代会長市原正一氏の歌からとった。

内容は、「私の好きな一首」、自ら選ぶ「私が選んだ私の一種」、投稿者数に合わせて雑詠（Ⅰ）（Ⅱ）と名前順に分け、前号の評を各会員が順番に行う。現在まで、通算404号が発行されている。

令和3年2月20日発行冬号より

【私の好きな一首】

落ち着かず何時も何かが吾を追う
一人の暮しは気楽な筈だが
柳沼幸子

「何時も何かが吾を追う」私も同感です。十二月から正月にかけて気忙しい日々でしたね。お一人暮しの生活は責任感が増し、あれこれと気配りが大変だったのでしょう。心の変化を歌われるのはいいですね。細かいところまでの気づかいが出来る年令になられたという事です。頑張りましょう。（古畑ハツ子）

短歌をきっかけに広がる学び

会員の真船範子氏から話を伺った。「年齢とともに学ぶことが少なくなっていたが、短歌会に入ったことで、平安時代から続く短歌を学ぶ機会に恵まれた。体を動かすことは年齢とともに難しくなることもあるが、短歌会に入ったことで、頭も使うし本も読むようになった。他の本も読んでみたいと思うようになり、短歌会が学ぶきっかけとなり、そこから学びが広がっている」と笑顔を見せた。

50周年をむかえて

須賀川短歌会は発足から50年を迎えた。「足元をたしかめながら自分を見直し、自分に素直に短歌を『心のふるさと』として歌を詠み続けていきたい。また、会員を増やすための周知活動も大切に行っていきたい」と小野口氏は語った。今、会員から吟行会を行いたいという話が出ている。同じ景色を見ても十人十色の景色があり、それがまた面白いのだそうだ。新型コロナウイルス感染症の収束後には、須賀川短歌会の吟行会で、学ぶ楽しさを味わう笑顔が広がっていることだろう。

辞書を片手に言葉を考える参加者